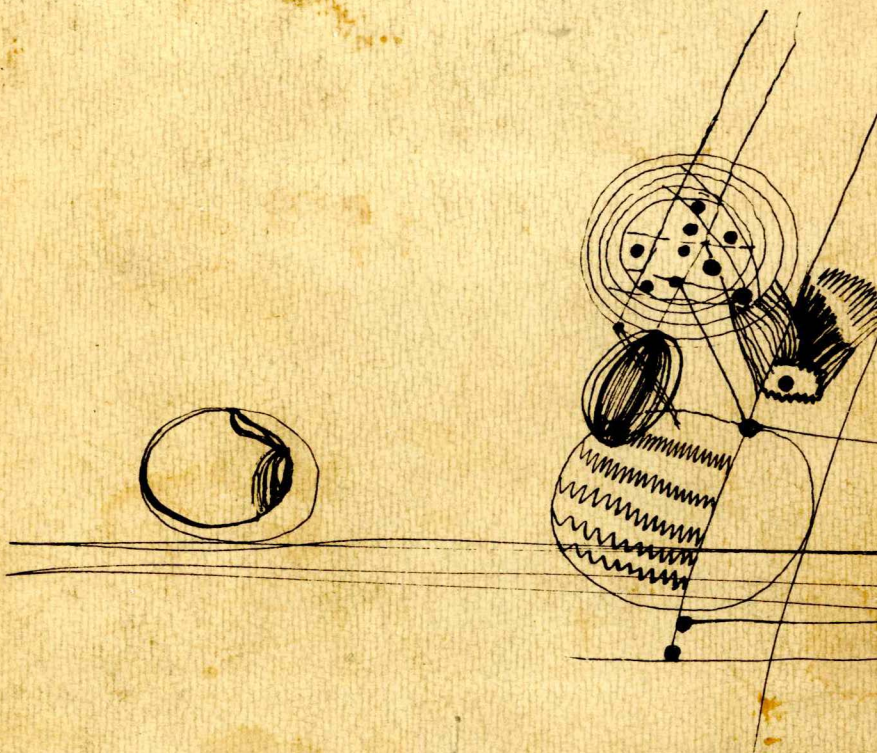
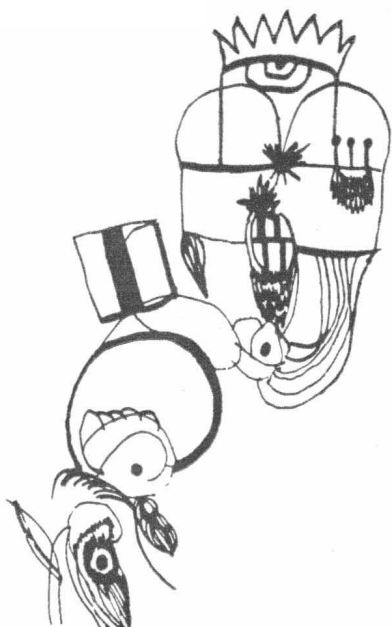




られた日々

吉村 昭



筑摩書房

彩られた日々

著者吉村昭

一九六九年十月二十日初版第一刷発行

発行者竹之内静雄

発行所筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八（〒一〇一―九一）

電話東京二九一―七六五一 振替東京四一二三

明和印刷 和田製本

装幀者難波田史男

©一九六九吉村昭

CS 80047

定価七五〇円

目次

背中の鉄道

キトク

彩られた日々

母

行列

トラック旅行

青い街

水の匂い

あとがき

307 279 245 175 157 87 41 23 1

背
中
の
鉄
道

みごもった妻は、医師のすすめで齒の治療に通いカルシウム剤をのんでいる。腹部で動きはじめた胎児に、自分の体の石灰質を吸収されることが不安でならないらしい。

「肉屋で牛か豚の骨を買ってこいよ。それを粉にしてのんでみるといいぞ」

と、私は、笑いながらも半ば真剣に言った。

十五年前、肺の空洞をつぶす手術を受けた私は、背部をメスで切り開かれ、五本の肋骨を障子の棧でもはずすように取り除かれた。そして、その後一ヶ月ほどの間灰色の骨粉を多量にのまされたのだ。

骨粉は、獣骨の粉だということだったから犬か豚か牛か、いずれにしてもそうした類いの動物の骨だったことにまちがいはない。

——つまり蟹のハサミと同じだね。石灰分さえ補給すれば、少しずつ再生して一年後ぐらいにはつながるものだよ。

外科医のそうした説明にうなずきながら、私は、白墨のような粉っぽい味をしたその骨粉をのみつづけた。

それから一年……、私は、その骨粉の効果を探るために、へこんだ左の背部に手を廻して指先

で皮膚をおずおずとさわった。

肉づきもすっかり薄くなっていたので、骨のある部分とない部分との差はあきらかだった。そのハンモックのようにへこんだ骨のない部分はふにやりとしていて、私には、それが皮膚の下に直接納っている肺臓の柔かさのように思えてならなかった。

しかし、月を経るにしたがって、その柔かい部分も徐々にせばまってゆくようだった。

私は、鉄橋の架設工事を連想した。川の両岸からタラバ蟹の脚のような鉄骨が、一節ずつのびてゆく光景——。それと同じように、私の肋骨の橋も骨粉のおかげで少しずつ再生して、ほぼ一年後には完全につながってくれたのだ。

「終戦後間もない頃だから、そんな原始的なものをのまされたんでしょう。第一、気味が悪いわ」

と、妻は、眉をしかめる。おそらく妻は、生理的な嫌悪と同時に、胎内の子供の骨格を牛や豚などの骨で作りに上げることに反撥感をいだいているのだろう。

妻は、二度目の妊娠で、初めの出産の折は歯のことなどほとんど関心も払わなかったらしいが、昨年の春、信号無視の乗用車にはねられて前歯を二本折ってから、必要以上に歯のことを気にするようになっていた。

折れた前歯は義歯にしてあるが、玉蜀黍の色変りの粒のように、その義歯だけが青ずんだ光沢を帯びている。今度の妊娠でも、妻をおびえさせているのはこれ以上義歯を歯列の中に加えさせ

たかないことなのだ。

妻は、几帳面に歯の治療に通っていた。歯科医は女医で、妻は、長話をして帰りがおそくなることもあった。

或る雨の日、歯科医院からもどってきた妻が、

「歯医者さんの所で、あなたの好きそうなものを見ちゃった」

と、悪戯っぽい眼を光らせた。

「なんだ」

机に向ったまま、私は、言った。

「鯛が骨だけで泳いでいるのよ」

私は思わず振り返り、妻の顔を見つめた。そこには、私の反応を充分に予期していたらしい妻の笑いをふくんだ表情があった。

「嘘じゃないの、ほんとよ。グラフ雑誌の写真の中で泳いでいたの。残酷な感じがしたけど、きれいだっただわ。人気質の料理人が、骨だけで泳がせる技術を持っているんですって」

「ほんとか」

私は、念を押した。

妻が、うなずいた。

私は、妻の濡れた洋傘を手にすると、アパートを飛び出した。そして、雨の中を小走りに舗装

路に出ると、車の行き交う街道を突っ切り、齒科医院のドアを押した。

私は患者を装って待合室に上ると、妻に教えられたグラフ雑誌を手にとった。せわしく頁をくって行った私は、或る個所にきた時、思わず目をみはってしまった。

ガラス張りの水槽の中に、わき腹の肉を両側から大きくそぎ落された大柄な鯛が二尾泳いでいる。そして、そのわき腹の部分には、はつきりと骨が何本も透けてみえている。骨だけで泳いでいるという妻の表現も決して誇張ではないほど、肉は骨ぎりぎりまでそぎ落されている。正面からの写真も載せられているが、頭部だけが水中で泳いでいるような奇妙な形に見えた。

「ほんとでしょ。骨が泳いでいたでしょ」

齒科医院からアパートにもどると、妻が私の眼をのぞきこんだ。

私は、黙ったまま机の前に腰を下した。写真の説明書きによると生きづくりの一種だということだが、今まで私の眼にしてきたその種のものは、大きな皿の上で口を開け閉じしている魚たちの姿であった。そして、それらは例外なく平凡に料理された刺身やタキなどよりむしろ死骸といった実感が濃く、口の中にすべり込んでくる魚の肉の舌ざわりにも不快な滑らかさがあった。

しかし、肉を大量に落された鯛は、生きづくりの魚たちとはちがった生気があふれているように見えた。鱗は両腹失われてはいたが、自身の肉を通して透けている骨は水々しく、丁度ガラス細工の魚のように光り輝いていた。

私は、窓の外の雨脚を見つめながら透けていた骨、ガラス面の中でこちらを向いて光っていた鯛の二つの眼を思い起していた。そして、自然と手術後シャーレの中で光っていた自分の肋骨の肌の色を思い起していた。

私の手術は、六時間近くかかった。終戦後間もなくのことで手術中の死亡事故も屢々で、それに麻酔薬の不足からその六時間は、私に堪えがたい激痛と恐怖を与えつづけた。漸く切開された皮膚の縫合も終り半身を起された時、私は、タイル張りの床に置かれたシャーレの中に切断されたばかりの私の肋骨を見た。それは、ひどく水々しい肌をしていて、血に染ったガーゼと雑居していた。

担送車が、車輪をきしませて手術室の出口の方に動きだした。私は、顔を横にして自分の体から取り除かれた肉体の一部を食い入るように見つめつづけた。そして、その骨も私の肉体との別離を惜しむように、私の体をじっと見送っているような錯覚を感じた。

その翌朝私は、骨を返してくれ、と回診にきた若い外科医に喘ぎながら言った。肋骨が外されたために肺臓に外圧が加わり、切開された傷の痛みと呼吸の苦しさで私は呻きつづけていた。

外科医は、私の顔をしばらく呆れたように見つめ、そしてから薄く笑った。

「ぼくのものなんだから、返して下さいよ」

私が息を整えながらも顔色を変えて言うのと、外科医の微笑が一層深まった。

「さあ、あるかなあ」

外科医は、頭をいたずらっぽくかしげた。そして、「今ごろは、犬にでも食われているかも知れないよ」

と、可笑しそうに眼を輝やかした。

しかし、一時間ほどもすると、病室に入ってきた外科医は白いガーゼに包まれたものを私に差し出してくれた。

「たぶんこれだと思うけど、もしかすると他人のものかも知れんよ」

外科医は、微笑しながらも半ば真剣な表情で言った。

手を動かそうとした私が呻き声をあげたので、外科医が、私の頭の上でガーゼをひらいてみせてくれた。

少し彎曲した平たい骨が、私の眼に映った。

「ぼくの骨です」

私は、ためらうこともなく言った。なぜか分らぬが、私は、それを自分の胸部の中で突っ張っていた肋骨の一本だということを直感的に信じ込んだ。

その骨を、私は、十年近くも持ちつづけた。脱脂綿を敷いたセルロイドの鉛筆箱に入れ、時々出してはフランネルで拭いた。

ガラスの小さな水槽の中に沈めて金魚を放ったこともある。水の中で骨は、いきいきと息づいてみえた。そして、金魚はそこに動物質の匂いをかぎとるのか、朱を一刷け刷いたような柔軟に

伸縮する口吻を私の骨の肌に飽きる風もなく突き当てていた。

が、二年前、その骨は、私の眼の前から消えた。ぶらりとやって来た弟が、私が煙草を買いに出たすきに見つけ出して持ち去ってしまったのだ。

「なぜとめなかった」

「いけなかった？」

妻は、可笑しそうに眼を光らせた。

私は、舌打ちした。そして、

「弟のやつ、何て言ってた」

と、少しひるんだようにきいた。

「兄貴のやつ、こんなものまだ持ってやがる……と言ってたわ」

私は、仕方なく苦笑した。

翌日、私は、公衆電話で弟の会社に電話した。

「返せよ」

私は、言った。

「なにを？」

笑いをふくんだ声が戻ってきた。

「とぼけるな。昨夜持ってたろ」

「ああ、あれか」

「返せよ」

「もうないね」

「どうしたんだ」

「捨てちゃったよ」

「うそつけ」

私は、うろたえた。

「兄さん」

弟のたしなめるような声が流てきた。

「いけない趣味だね。あんなもの持ってたってどうなるんだい。病気は、遠くなりけりだよ。家庭を持つようになれたって言うのに、一人前の男にはそぐわない持ち物だね。おれに見つかったら諦めてもらうんだね。じゃ忙しいから電話をきるよ」

「貴様」

弟が、可笑しそうに受話器をまだ持ちつづけている気配がしている。

「おい、本当に返さないつもりかよ」

私は、仕方ない笑い方をしながら言った。

「ああ、返さないよ。第一、自動車の窓からポイしちゃったんだから返そうにも返せないさ」

「おぼえてろ」

私は、こちらから受話器をかけた。

しかし、不思議なことに私の胸の中には憤りも口惜しさも湧いてはいなかった。弟に見つかったことが不運だったのだという後悔は残されたが、なんとなく私は、骨を持ち去られてしまったことに安らぎのようなものも感じていた。

その後も私は、弟に会っても骨のことには触れず、弟も素知らぬ風を装っていた。ただ何気なく見交す眼に時として同時に薄笑いが湧いて、私と弟は、無言のまま眼で互いに会話し合っていた。

弟のその眼は、「ざまをしろ」と言っているようでもあり、「お気の毒さまでした」と言っているようにも感じられた。私は、いまいましさと羞恥をおぼえて苦笑する以外にはなかった。

……が、鯛の骨の映像は、シャーレの中の骨、金魚鉢の中の骨、青いセルロイドの反映をうけて淡く染った鉛筆箱の中の自分の骨を新らたに思い起させた。白身の肉に透けた魚骨と、自分の体から切りはなされた肋骨の記憶とが切なく重なり合った。

私は、机の前に坐りながら自分の執着を愚いことだと言いきかせつづけた。骨は、結局ただの物質にすぎないではないか。自分の肉体の一部であったにしても、分離されてしまえばその機能は全く意味のないものになってしまうのだ。

しかし、透けていた鯛の骨の映像は、自分の眼の中に焼きついてはなれなくなった。そしてそ

の日も翌日も、私は、腑甲斐ないほど苛立った落着きのない刻をすごした。

妻は、そんな私を顔をゆがめて観察するように時折うかがっている。そして夕方、妻は、机の前に寝ころがっている私のかたわらに坐ると財布を私の胸の上に置いた。

「はい、旅費。あんなこと教えるんじゃないわ。しくじっちゃった」

妻は、妙に蓮々口調で言った。

私は眼を閉じ、拗ねたように寝返りを打った。臨月間近い妻の出産を控えて、そのための物入りも予定されている。物好きな旅のために費される余裕の金などあろうはずがないのだ。

「あなたの病気なんだから、仕様がないわ。早く行つて見ていらっしやい」

妻は、子供にでもいうような口調で言った。

生意気なことを言いながら、私は胸の中でつぶやいた。私の胸の中をなにかも見抜いている妻がいまいしかった。

私は、ふてくされたように寝そべりつづけた。が、しばらくすると妻の殊勝な気持を利用してやろうという気になった。そして、余り気乗りもしない表情を装って列車の時刻表を繰ると、「今夜発つて、明後日の朝にでも帰ってくるか」

と、呟くように言った。

妻は、かすかに苦笑を漂わせながらポストンバッグを出してくると、それに洗面道具を入れたりしてくれた。

二歳四ヶ月になる長男が居眠りをはじめた頃、私は腰を上げた。

「早く帰って来てね、もう産み月なんだから……」

靴をはいている私に、妻はさすがに心細そうに言った。

私はうなずくと、渡されたボストンバッグを手にアパートを出た。罪の意識に似たものがないでもなかったが、細い露路をぬけ出ると急に胸の中が立ちさわいで、ボストンバッグを手に坂を駅の方へ足を早めて歩いて行つた。

名古屋で夜が明け、列車は、伊勢湾沿いに南に走つた。

私は、車窓から朝露に濡れた田畠や瓦のつらなりをながめながら駅弁を食べた。

手術をしてから十二年、骨に魅せられてわざわざ旅をしている自分が余りにも未練が過ぎるように思える。私の体は、充分健康なのだし病いの痕跡も全くなく、自分でも背中に残っているメスの跡を忘れ去ってしまった。

私は、幼い長男のことを思い出して思わず頬をゆるめた。メスの痕に最も関心を持っているのは、もしかすると幼い長男だけなのかも知れない。

十日ほど前、子供を連れて銭湯に行った私は、初めて子供の口からニンゴーゴーという言葉に耳にした。その発声の意味を私は理解しかねていたが、一昨日の夕方テレビに眼を向けていた子供が、突然画像を指さしながらニンゴーゴー、ニンゴーゴーと繰返し叫んだ。